ギリシア喜劇断片（五）

下田立行

アレクシス（続き）

『女髪結い』（続き）

KOΥΡΙΣ

一一三

左様、儂の倅はあんたらがたった今見たとおりの
人間となった。オイノピオーンだの、
マーローンだの、カペーロスだの、ティーモクレースの類だ。
酔っ払い以外の何ものでもないんだから。だがもう一人は――
何と呼んだらいいんだ。土塊、鋤、土から生まれた
泥人形……

〈出典〉I.〔一～六行〕アテーナイオス　一〇・四四三D、「アレクシスが『女髪結い』の中で呑み過ぎの人について論じ、次の様に述べている。【本断片】。II.〔二～四行〕エウスタティオス『オデュッセイア註解』一六二三・五一、「〔アテーナイオスが〕トラキア人マーローンについて述べる中で、アレクシスがだれかを酔いどれの無頼漢としてからかい、【本断片の「オイノピオーン～何ものでもないんだから」】と言っているとして、マーローンが酒に関してはそれを所蔵することばかりでなく、呑むことにも熱心だったことを明かしている」。III.〔四～六行〕エウスタティオス『イーリアス註解』九六二・三二、「ゲー γῆ（大地）を語源とする名称が必ずしも厳かなものでないことは、ブーガイオス βουγάιος〔大法螺吹き〕や意味が明白なゲオーロボス γεώλοφος〔丘〕などの語に劣らず神話のゲーゲネイス Γηγενεῖς やギガンテス Γίγαντες からも明らかである。ここで【本断片の「だがもう一人は」以下】も一役買っている。この台詞は喜劇詩人アレクシスからとされる」。

【注】オイノピオーンは神話上の人物でテーセウスとアリアドネーの子とも、酒神ディオニュソスの子ともいわれる。オイノピオーン Οἰνοπίων は、ディオニュソスの修飾的形容詞として用いられるオイノプス οἴνοψ「葡萄酒で顔の赤くなった、葡萄酒色の」という形容詞からの造語であり、ここでは名称そのものに意味があると考えられる。マローンはトラキアのイスマロス市にいたとされるアポロンの神官で、身を守ってくれた礼としてオデュッセウスに極上の葡萄酒を贈った（『オデュッセイア』九・一九七以下）。カペーロス κάπηλος は普通名詞としては小さな店（カペーレイオン καπηλεῖον）を構える「小売商人」を指すが、人名となっている例は見当たらない。小売店といっても「居酒屋」を念頭に置いてい

るものだろう。ティーモクレースは恐らく実在の中喜劇詩人のことだというが不明。これら酒呑みに対し、土塊のごとく罵倒されているのはしかつめらしい哲学者たちのことか？　アリストパネースは『雲』八五三でソクラテスの徒をことと同じくゲーゲネース γηγενής「土から生まれた」といわせている。

断片一一四は「私たちはとうに食事を済ませたので」の意味の一行未満断片。

『クラテイアあるいは薬売り』

ΚΡΑΤΕΙΑ Η ΦΑΡΜΑΚΟΠΩΛΗΣ

クラテイアはメナンドロス『嫌われ者』のデーメアースの娘の名としても使われている。また、ムンネーシマコス（前四世紀）も『薬売り』という題の喜劇を書いている。

一一五

まず俺は、ネーレウスという老人のところで
海藻の回りにつく牡蛎、それと海胆を見つけて
買い入れた。豪華絢爛たるご馳走の
前菜として出すにはうってつけだからね。
その支払いが済むと、小さな魚が並べられて、　五
どんな目にあうか怖れてピクピク震えているんで、
俺に関する限り安心していろ、ひどいことはしない、
と言ってやってから、大きな灰色の魚を買った。
次に電気ナマズを仕入れた。その時思ったのは、
女が柔らかな指で背鰭に触れても、　一〇
傷一つつかないようにせねば、ということだ。
そしてフライパンで炒めるのに、ベラ、カレイの類、
腰の曲がったエビ、カマツカ、スズキ、コイを仕入れた。
それで孔雀よりも彩りの綺麗な料理を作ったんだ。
他には肉の類、豚足だの、豚の鼻や　一五
耳や、それにレバーも仕入れた。網脂に包まれたやつだ。
それは、肌が土気色をしてるのを恥ずかしがっているからね。
料理人はそんなものは相手にせず、見向きもしないだろう。
きっと客の顰蹙を買うに違いないんだから。だが俺は賢明にも、
肉を使って、こんなに味も見栄えも良く調理するから――　二〇
俺は自分で料理するんだ――それを食べる連中ときたら
時には料理があんまり旨いっていうんで、
皿にまで歯を立てるほどなんだよ。
俺はどんな材料でも、その調理法と
味付けの仕方を示す用意がある。誰でも　二五
学ぶ気があればただで教えてやってもいいんだ。

〈出典〉アテーナイオス　一〇七A、「豚の足、耳、さらに鼻については……アレクシスが『クラテイアあるいは薬売り』で述べている……。この一節全体が色々な点で有益だが、今は君の記憶が曖昧なようだから、私が一通り暗誦してみよう。この喜劇作家は次のように書いている。【本断片】」。

【注】話し手が男性であることは分詞等から判るが、それ以外は不明。だが、この喜劇の題『クラテイアあるいは薬売り』の「薬売

り」は男性単数であり、ここの話し手である可能性もある。本断片から話し手が専門の料理人ではないが料理自慢であることが判る。この断片で興味深いのは一つには一五行以下の豚の足、耳、鼻、レバーなどに（専門の）料理人が目もくれないと述べてる点であり、もう一つはアテーナイオス引用箇所で話題となっている「網脂に包まれたレバー」のことである。古代ギリシア人は魚好きで有名であるとはいえ、肉類も食べたことは明らかなので、料理人が目を向けないのは豚の耳、鼻、足などのどちらかというとゲテモノのことを指すと見てよいと思われる。肝臓は食材として喜劇にはよく見えるが、叙事詩、悲劇などではあまり語られないので、やや下等な食べ物という通念があったのかもしれない。本断片の前後に挙げられたいくつかの引用から、肝臓は網脂に包んで料理する習慣があったらしい。これは今日でも用いられる料理法である。

一一六

……小僧、でかいやつをくれ。親愛のしるしに
ここにいる方々の分として柄杓四杯を注いでくれ。
それからその後でエロース神の分柄杓三杯を加えるんだ。
一杯はアンティゴノス王の勝利を祝って、
一杯は若いデメトリオス殿に、
三杯目は……
ピラ・アプロディテ様に。ようこそ、お集まりの皆様、
不肖わたくし幸い溢れるこの杯から飲ませていただきます。

〈出典〉アテーナイオス　二五四A、（「城攻めの」デーメートリオスに対するアテナイ人の阿諛追従について述べる箇所で）「アレクシスが『薬売り』別名『クラテイア』の中で、宴会の席である人物のために乾杯する人物を登場させ、こう言わせている。【本断片】」。

【注】アンティゴノス、デーメートリオスさらにアンティパトロスの娘でデーメートリオス一世の妻ピラの名が出ていることから、アンティゴノスはアンティゴノス朝の祖であるアンティゴノス一世、デーメートリオスはその子デーメートリオス一世であることが判る。アンティゴノス・デーメートリオス父子はマケドニア王カッサンドロッスの支配下にあったアテナイを前三〇七年に解放し、その年ピラはアテナイによって神格化され、ピライオン（ピラ神殿）を贈られている。パウサニアースによるとこの神殿はピラ・アプロディテのものとされる（一・三七・七）。断片中の「アンティゴノスの勝利」自体は前三〇六年のキュプロス島サラミス沖の海戦におけるデーメートリオスのプトレマイオス一世に対する勝利を指すと思われる。いずれにせよここでは独立国としての矜持を失ったアテナイの姿が一登場人物に仮託されているわけである。このような背景があるので三行目の「エロース神」云々はやや判りにくく、Kaibel はこれを「私は三杯を救い主である神々に捧げましょう」という意味になるよう校訂している。この三杯は神に響えられた三人に対するものとして判りやすい。しかし、それだと乾杯の捧げられる相手が宴会仲間の分と三人の人名の出ている分は属格で、救い主の分（これは名の出ている三人と同じだが）は与格で表されることになるのでやや整合性に欠けるように思われる。デーメートリオスの十五歳年上の妻がアプロディテに響えられる文脈ではエロースが登場してもおかしくはないのではないか。カッサンドロスがピラの兄弟であ

ったことも考えると、デーメートリオスとピラの愛の絆が兄妹の愛に勝ったと、アンティゴノス父子のカッサンドロスに対する勝利を美化して、言えなくもないだろう。事実前二九四年ピラは、アンティパトロスの娘としてデーメートリオスをマケドニア王の座に就かせ、彼のマケドニア支配が挫折した二八八年、ピラは毒を仰いで自決している。

柄杓一杯、二杯の杯と訳した語はキュアトス κύαθος で、本来は混酒器（クラーテール）から杯に酒を汲む柄杓のことであるが、アッティカでは度量衡の単位として用いられた。それだと約五〇cc足らずということになる。柄杓一杯といえばまあその位のものであろう。二行目も少し壊れているが、その分も入れると話し手は大杯に柄杓で約七杯三五〇cc程のワインを注がせて飲むことになる。

一一七

甲：俺がカッリメドンの娘たちの治療をして
もう四日目だから。乙：娘って、奴には
女の子供がいたのか？　甲：ああ、といっても眼の方だ。
そいつらの狂いようは、プロイトスの娘たちの狂乱を
ただ一人やめさせたメランプースでさえ治せやしない。

〈出典〉アテーナイオス　三四〇A、「アレクシスが『クラテイア あるいは薬売り』で【本断片】と。アレクシスは『集会の男たち』〔断片二一八〕でも同様に彼（カッリメドーン）のことをからかっている」。

【注】引用個所は斜視のカッリメドーンについて扱っている。一、二行の「眼」はコレー κόρη で原義が少女であるが、人形の意味となり、さらに瞳に小さな人の姿が写ることから「眼」「瞳」の意味で用いられた。ティーリュンス王プロイトスの三人の娘たちは成長すると気が狂い、自分たちを若い牝牛だと信じてしどけない姿で走り回り、王に頼まれたメランプースらがこれを治癒したという神話がある。断片一一八は「海老男カッリメドーンがオルペウスと一緒に……」という一行断片だが、理解しがたい。

一一九

クローバーで編んだたくさんの花輪を懸けて……

【注】クローバーと訳したメリロートン μελίλωτον（引用個所ではその形容詞）はメリ「蜂蜜」とロートス（飼料に使われる三つ葉の植物、時に「蓮」）の合成語で、蜜を多く含むことから名付けられた。

一二〇

それから俺にはヘルマイスコスがこんなでっかい
カンタロスで酒を呷ってるのが見える。そばには
奴のケットと背嚢が転がってる……

〈出典〉アテーナイオス　四七三C、「アレクシスが『クラテイア』で（居酒屋で呑んでいる男について）、【本断片】」。

【注】カンタロス κάνθαρος は酒盃の一種で、二つの取っ手が付き、深さのあるもの。三行目のケット（ストローマテウス στρωματεύς）と背嚢（ギュリオス γύλιος）から、呑んでいる男が兵士であることが判る。ケットと訳したストローマテウスという語は Arnott によると、コイネーの時代にはストローマトデスモス στρωματοδέσμιος すなわち野営用の寝具類を詰めた袋と同義になっているという。（cf.W.G.Arnott, *Alexis; The Fragments*, (96) p.335）. もっとも現存の喜劇および断片に見られる野営用寝具類の語彙にはとくにそれを詰めるものを指す言葉は見当たらないということである。ともあれ、これらの道具類をかたわらに「でっかい」杯で酒を呷る兵士は、断片一一六で「でかいやつ（杯）をくれ」と言って戦勝を祝っている男と同一人物ではないかと思われる。

『舵取り』

ΚΥΒΕΡΝΗΤΗΣ

メナンドロスに『舵取りたち』がある。残っている二つの断片からは「舵取り」が劇中どういう役割を果たしているか明白ではないが、断片一二一冒頭に現れるナウシニーコスという人名は語構成要素として「船」（ナウス ναῦς）と「勝利」（ニーケー νίκη）を有しており、ギリシア喜劇中では人名がその登場人物の性格、役割、職業等を暗示している、あるいは体している例は少なくないから、ここで幇間と思われる人物に話しかけられているナウシニーコスなる人物がすなわち「舵取り」である可能性は大きい。なお、「舵取り」と「船主」は必ずしも明確に区別されるわけではなく、同一人である場合が考えられる。船主は船を所有しているか、少なくとも資金的な援助を行っているわけで、お大尽であるから、その宴席に幇間が侍るという状況は十分考えられるのである。

一二一

甲：ナウシニーコスさん、太鼓持ちてえのは二種類あるんです。
一つは、あっしらみたいな普通の、喜劇のネタになってるやつで
「黒幇間」というの。もう一つはどういうのかいうと、
ペルシアの太守だの、脚光を浴びた将軍だのの役を演じて見せる、
「大尽幇間」と呼ばれてるやつでしてね、
そういう人たちの生活ぶりを活写するんで。眉を吊り上げて
千タラントもの金をばらまくんですよ。
その手の幇間とかそんな芸のことを知っておいでで？
ナウシニーコス：　　もちろん。
甲：ま、そういうふうに二種類あるんですが、商売の
本質は同じでしてね、お追従を競うということなんですわ。
だから、わたしらの暮らしにしても、運の神による割り当て先が
お大尽の場合もあれば、それほどでない場合もある。
それで羽振りがよくなったり、お先真っ暗になったりというわけ。
勉強になりますかね、ナウシニーコスさん？
ナウシニーコス：　　いや、よくわかった。
だが、これ以上賛成したら、何かせびる魂胆だろう……

〈出典〉アテーナイオス　二三七B、「アレクシスは『舵取り』の中で次のように幇間には二種類あると述べている。【本断片】」。

【注】三〜七行は、大意はほぼ明白であるが、文法上不可解な点が多く、さまざまな校訂や削除、あるいは並べ替えなどが試みられているが、Arnott が言うように、複雑に絡まりあった問題点を解消する決定的な手段は見当たりそうにない。詳しくは Arnott p.336 以下を参照。この断片で興味深いのは幇間に二種類あるとされていることだが、このような区別は他には見られず、まず劇中の虚構と考えてよい。そうすると、話者甲の解説に「もちろん」知っていると答えるナウシニーコスの知ったかぶりが知られるわけで、成り上がりか田舎者の船主ナウシニーコスが幇間に手玉にとられる、という劇の基調が見えてくるように思われる。なお一般の幇間を「黒」とするのは、(1)幇間は黒い服をきていた（ポルックス　四・一一九「幇間は黒か灰色の服を用いる」）、(2)（仮面の）髪の毛が黒い、(3)（仮面の）顔の色が黒い、の諸説がある。(3)についてはポルックス四・一二〇「幇間には垢すり棒と香油瓶が付き物」、同一四八「追従者や幇間は体操場を離れることがなく、色黒である」とある。いくつかの喜劇断片等から知られるところでは、幇間は自分が仕える大尽の意のままに何でも行わねばならず、また失敗するとひどい目にあうから、普段から身体を鍛えておく必要があったらしい。黒幇間というのが上で見たように正式の呼称ではないにせよ、舞台上で演じられればすぐに観衆の納得を得られる表現であったのだろう。これに対する「大尽幇間」（直訳は「厳粛な幇間」）は一語であるが、この個所にしか見られない語である。このことも幇間に二種類あるというのが劇中の仮想であることを裏付けている。

一二二

……干しイチジクがやって来た、
アテナイの紋章だ。そして、テュモンの束が……

〈出典〉アテーナイオス　六五二C。エウスタティオスにも引用がある。

【注】食後のデザートの場面と解されている。ギリシア中期劇の食事の場面では、「供される」の代わりに（食べ物が）「やって来る」という表現が使われる場合が多い。もっと大仰に「踊って来る」「（風のように）音立てて来る」「（バッコスの信女のように）狂乱して来る」「入港する」などの例もある。イチジクは生のも干したのもアテナイ人にとっては重要な食べ物であり、特にデザートとして好まれた。食後さらに葡萄酒を呑むために渇きを刺激するために食べられたともいう。後半のテュモン（θύμον）ははっきりしないが、タイムのような香辛料として用いられる薬草か、ニンニクの一種と考えられている。どちらも食後の飲酒刺激剤としても用いられたようである。

『博徒』　KYBEITTAI

すべて散逸しているがアムピスその他にも同名の喜劇があり、中期劇では好まれた題材らしい。アテナイ人の賭け事好きはよく知ら

れている。題名となっている語彙はキュボス（κύβος「立方体、サイコロ」）からの派生語。

一二三

……わたしらが
ちょうど豚足かなんかで朝飯を食べ終えたとき……

〈出典〉アテーナイオス　九六A、「（豚足について）アレクシスが『博徒』で。【本断片】」。

【注】豚足と約したアクロコーリオン（ἀκροκώλιον）はLSJで動物の鼻、耳、足などと説明されているが、引用箇所前後ではもっぱら豚の足について用いられている。

『キュクノス』　KYKNOΣ

エウブーロスが『パーティー別題キュクノス』を、アカイオスが『キュクノス』を書いている。キュクノス κύκνος は普通名詞としては「白鳥」のことだが、神話上の人名にもなっており、軍神アレースの子で山賊家業をなしヘラクレスに殺された者や、ポセイドンの子でトロイア方の武将としてアキレウスに殺された者、あるいは同じくポセイドンの子でコロナイの王として神話が伝わっている者などの名となっている。これが人名だとするとこの喜劇はしばしば見られる神話を題材とした笑劇ということになろう。だが、残っている断片ひとつだけでは判断しがたい。しかしそれらの人物のなかでも断片一二四に垣間見られる酒宴に関連づけやすいのはやはり酒豪ヘラクレスと縁のあるアレスの子であろうか。

一二四

つやつやとしたテリクレス作の混酒器が
中央に置かれ、年代物の白い葡萄酒を
満たされ、泡だってる。私がその甕を空のときに
磨いて光沢を出し、しっかりした台を
つけて据え、実を付けた木蔦の枝を
冠せて……

〈出典〉アテーナイオス　四七二A。

【注】場面はパーティーの準備ができた室内で、話し手は家僕であろうか。韻律は悲劇のイアムボス・トリメトロスのように荘重であり、語彙も抒情詩のように華麗もしくは詩的なものが使われている。韻律については、(1) resolution（長音節が二つの単音節に分解される）がない。(2) caesura（詩脚の中間で語彙が終るもの）の位置が規則的。(3) Porson の法則（詩行の末尾が基本的に短長短長である韻律形式で、長長短長が許される場合、最初の長の部分で語彙が終らないのが普通）が守られている、などの点が指摘されている（細かく説明すると長くなるので略す）。語彙については、二行目の葡萄酒は通常のオイノスではなくネクタルで、五行目の木蔦がキッソス κισσός でありキットス κιττός でないことがあげられる。ア

ッティカ方言において前者は詩的な、あるいは高揚した文体で用いられ、後者は世俗的文体で用いられる。

『キュプロス人』　ΚΥΠΡΙΟΣ

ディカイオゲネスの『キュプロスの人々』という悲劇の題が伝わっている。

一二五

……甲：それからどうやって来たんだ？　乙：どうにか焼き立てのを引っつかんだ。甲：ふとい野郎だ。それで、いくつ持ってきた？　乙：十六個だ。　甲：ここへ出せ。乙：八つは白いパン、同じく八つは灰色のやつだ。

〈出典〉アテーナイオス　一一四B、「アレクシスは『キュプロス人』の中で次のように、混ざり物のあるパンを灰色パンと呼んでいる。【本断片】」。

【注】引用箇所の「混ざり物のある」とした形容詞は本来「汚れた」の意味で、見た目に汚い色をしていることをいう。もっとも古代のパンはどんなに精製した白パンであっても今日のそれに比べると遙かに混ざり物が多かったと考えられる。

一二六

全粒小麦のパンをたったいま食べて……

〈出典〉アテーナイオス　一一〇E。

【注】「全粒小麦の」としたアウトピューロス αὐτόπυρος なる形容詞は LSJ で whole wheaten meal とあり、柳沼訳（『食卓の賢人たち2』（京都大学学術出版会 '98）p.380）は「ふすま入り（パン）」としている。この語はこの箇所が初出であるが、アテーナイオスも詳しくは説明していない。Arnott は 'made of wheat and nothing but wheat' と注しているが、それ以上は述べていない。強意の代名詞 αὐτός と小麦を意味する πυρός の合成語としては、Arnott の解釈が一般的であり「小麦だけで作ったパン」かとも思われる。しかしそれだと、精製の程度はともかく、小麦だけから作ったパンはもとから存在したであろうから、アレクシスの時代になって初めてこの語が見える理由を考えるなら、アテナイ〈帝国〉が崩壊して食糧事情が悪化し、純米ならぬ純小麦を食べることもままならない時代が続いて、銀しゃりではないが小麦百パーセントのパンを指す特殊な用語が生まれたのか、それともパンの種類が多様化して素朴なパンを指す言葉が新に必要になったのか。それともやはり、この語での αὐτός の働きは「小麦丸ごと」といった意味合いであり、従って試訳ないし柳沼訳のごとく全粒小麦を指すのかもしれない。

なお、出典箇所のすぐ後の、プリュニコスからの引用では同じも

のがアウトビューリテースと呼ばれている。

断片一二七は『反アッティカ主義辞典』の一語断片で略す。

『ラムパス』

ΛΑΜΠΑΣ

アンティパネスに同名の喜劇がある。題名となっているラムパスという語彙には、普通名詞としては、大きくわけて(1)松明などの灯り、(2)松明をかかげて走る競走、の二つの意味があるが、残っている断片等からはどちらと断定できない。しかしArnottによると、これらとは別に人名、恐らくは遊女の名とする説があり(Meineke, Breitenbach)、その根拠としてアテーナイオス　五八三B以下に上げられている遊女の一人の名が正にラムパスであることがあげられている。また、断片一二八の注を参照。

一二八

……食い潰したのか、
自分でそんな莫大な金を？　大地にかけて、兎の乳を手に入れても、孔雀の肉を食っても、わしはそこまではしなかった……

〈出典〉アテーナイオス　六五四F。

【注】引用が不十分であり、多少壊れているが大意は判る。とにかく何者かが大金を浪費したらしい。中・新喜劇では男が遊女に入れ揚げて大金を浪費するという設定がしばしば見られる。そこでラムパスを遊女の名とすると、一応辻褄は合うのである。本断片の話者が誰かははっきりしないが、若い男の父親かそれに近い人物が説教している、あるいは愕いて自問している場面ととるのが一番わかりやすい。もっとも若者の自問自答か、あるいは会話になっている可能性もないではない。疑問文は不完全で動詞はなく「食い潰した」は不定詞である。言葉を補って「わしは……食い潰すことができただろうか？」ととる説が恐らく正しいであろう。「兎の乳」という表現はここにしか見られないが、「鳥の乳」はアリストパネスが何度か用いている。いずれにせよ非常に珍しい贅沢なものの譬えである。ちなみにアテナイでは兎肉は珍味の一つに数えられた。また、アイリアノス『動物誌』三・四二によると孔雀の肉を食することは贅沢三昧のしるしであった。Arnottによると贅沢など馳走と孔雀の肉の関係は遥か後代、十四世紀まで連綿と続いたといわれる。

『鍋』

ΛΕΒΗΣ

ブラウトゥス『黄金の壺』の手本になったとする説がある（Arnott, p.859ff. に詳しい）。

一二九

甲：……俺が思うに、奴は
豚肉を茹でてシチューを作ろうとしたんだ。
グラウキアース：　　結構じゃないか。
甲：それで、煮詰めすぎちまった。

グラウキアース：　　なにも心配せんでいい。
そんな症状は治すことができるんだ。
甲：　　どうやって？
グラウキアース：安物の葡萄酒を、こう、平鍋の中に注ぐ。
わかるか？　それから、例の土鍋を熱いまま
その葡萄酒の中に突っ込むんだ。土鍋がまだ熱いうちは
胴をとおして水分を吸い込み、それが作用して
軽石みたいに細かな無数の穴ができる。
その穴から水分を中に取り込むというわけだ。
そうすると肉が完全には乾ききらず、
汁気たっぷりの、なかなかみずみずしい状態に戻るのさ。
甲：アポロンよ！　まるで医者みたいだな。グラウキアースさん、
そうやってみるよ。
グラウキアース：　　それでな、小僧、食卓に出すときは
よく冷やしてから出すんだ。わかるかな？
そうすれば湯気の匂いが鼻をつくことがなく、
すっかり抜けてしまうからだ。
甲：どうもあんたは、料理人より、弁論の原稿書きとして
ずっと才能があるようだね。
グラウキアース：　　君は自分の言ってることが分っとらん！
君は技術を馬鹿にしておる……

〈出典〉アテーナイオス　三八三C、「私は昔の料理人の一人について、彼が発明した技術を実際に試してみてその素晴らしさに触れ、感嘆の念を禁じえなかった。その料理人はアレクシスが『鍋』の中に登場させ、次のように言わしめている。【本断片】」。

【注】二人の対話となっている。一方の料理人グラウキアースはっきりしているが、もう一人はグラウキアースが一四行でバイ（παῖ［παῖς の呼格。「子供、奴隷」の意］）と呼んでいることから、(1)グラウキアース自身の弟子ないし奴隷、(2)料理人としてグラウキアースを雇った主人の奴隷、(3)雇われた料理人助手、などが考えられる。なお Arnott によるとグラウキアースという名について Webster (*Studies in Later Greek Comedy*, 2nd ed. (Manchester 1970) に面白い説があり、それによるとこの名はアレクサンダー大王の部下ヘーパイスティオーンの治療にあたった、当時高名な医師グラウコスからとったものではないかという。またアレクサンドロス麾下の部隊長の一人の名としてグラウキアースの名が伝わっている。グラウコスは前三二四年、ヘーパイスティオーンを死から救うことができなかったという理由で処刑された。これと本断片の話し手のひとりが、失敗しかかった料理を「救う」ことについて「医者のようだ」と述べていることなどを考え合わせるとありえないではない。また、グラウコスの処刑が登場人物にこのような名を与えるきっかけになったと仮定すれば、本作品の成立年代もある程度限定できるであろう。グラウキアースの述べる「処方」は医学書ないし科学書のパロディーであり、いくつかの語彙は専門用語ないし稀語であり、Arnott によると六つの言葉は喜劇では用いられていないとされるが、訳の上で表すのは難しかった。特に生理学的もしくは物理学的な「細かな無数の穴」は当時の医学では最重要の理論であり、I.M.Lonie は「ある意味でギリシアの医学理論は「穴」の理論である。人間の身体は「穴」の組織にすぎない」と述べているそうである（Mnemosyne 18 (1958) 128）。ヒポクラテスの医学書にも水分（体液）の浸透についてこの箇所と非常に良く似た表現で述べ

られている場合がある。

一三〇

金持のアリストニーコスよりも力のある立法家は
いない。……いま彼はこんな法を発効したからだ。
魚屋が魚を売るときには、一旦値段をつけたなら、
だれかに言い値より安く売った場合、
その魚屋をただちに監獄にぶち込む、
という法律だ。その心は、魚屋がこの法律を怖れて
適正な値で我慢するか、さもなくば夕方になって
生きの落ちたのを全部家に持って帰らせようという腹だ。
そうすれば婆さんも爺さんも小者もみんな
遣いに出されてそこそこの値で買うことができるだろう……

〈出典〉アテーナイオス　二二六A、「この作者〔アレクシス〕自身『鍋』の中で次のように述べている。【本断片】。またこれより前の部分では【断片一三一】と言っている」。

【注】アリストニーコスは次の断片一三二にもその名が出ているが、前三三四―三二二頃に政治活動を行った、デーモステネースと同時代の政治家と考えられている。彼はデーモステネースと同様、三二二年にマケドニアの敵として不在中に死刑判決を受け、アイギナで捕らえられ処刑された。断片一二九の中で述べたように、この作品が三二四年頃書かれたものだとすると、親マケドニア派の反感を買うほど活発に政治活動を行っていた時期と考えられる。本断片の発話者がアリストニーコスと魚の価格を低く抑えようとする法律を褒めていることは明らかである。以前に取り上げた断片の中にも魚の値が高いことを皮肉る一節があった。この断片に見られるような法律が実際に施行されたという証拠は他に存在しないが、前三三〇年頃から魚介類が品不足になって高騰した時期があったということであるから、値を抑制する法律は考えられないものではない。Arnott は言い値より下げてはいけない、というのは喜劇的な誇張かもしれないと述べている（断片一三一の二つの「立法」は明らかに誇張である）。このような「庶民派」のアリストニーコスと、断片一二九で助手か弟子に「弁論の原稿書き」と揶揄される料理人グラウキアースの間にはかなり明らかな対比が認められる。中期劇には古喜劇に比べ政治的色彩の濃いものはあまり見られなくなっているが、この程度ぼかしたものは存在することが判る。なお「遣いに出されて」とした一語は、意味は自然であるが文法的に不適切なためさまざまな校訂意見が出されている。「買う」の目的語として「鰯」や「烏賊」に相当する語を当てる説が有力に思われるが、決定的なものはない。

一三一

ソローン以降、アリストニーコスよりも力のある立法家は
一人として現れなかった。というのも、
彼は他にもありとあらゆる法を立案してきたが、
今またあらたに金色燦然たる法を導入しようとしているからだ。
それは、今後、魚屋が魚を売るときは、座っていてはならず、
ずっと立っていなければならない、というものだ。

さらに来年は、魚屋はぶら下がって売るべし、
という法案を提出すると言ってる。（悲劇の）神々のように、
機械にぶら下がって売り捌き、客を早く帰そうというのだ。

〈出典〉アテーナイオス　二二六B。

【注】機械仕掛けの神（ラテン語でDeus ex machina）は悲劇で用いられ、クレーンの如きものに吊り下げられた神が突然現れて、舞台上の人間たちには解決困難な問題を解決へと導く。その実際の構造等についてはあまり詳しくは判っていないが、本断片七行の「ぶら下がって」（κρεμαμένους）などから、恐らくクレーン状のものに役者が吊るされて、空中を浮遊するがごとく出現したものと察せられる。魚屋がそのような状態で商売をするというのは、もちろん喜劇上の空想に過ぎないが、断片一三〇と合わせて、売り手市場で尊大に構えて、値の上がった魚を売る魚屋に対する不満が、これら断片の背景にあることが窺えるのである。

一三二

甲．……この際言い訳はいい。「持ってない」とは言わせんぞ。
乙．何が必要なのか言って下さい。何でも買ってきますから。
甲．それでいい。まずは、胡麻を買ってこい。
乙．でもそれは内にありますぜ。
甲．　　刻んだ干し葡萄、
茴香、イノンド、辛子、ケール、シルピオン、
干したコリアンダー、スマック、キュミノン、ケーパー、
オレガノ、ゲーテイオン、アニス、タイム、
セージ、煮詰めた葡萄酒、胡椒、ヘンルーダ、リーキ……

〈出典〉アテーナイオス　一七〇A、「アレクシスは『鍋』の中で次のように調味料（香辛料）を列挙している。【本断片】」。ポルックス　六・六五、「調味料にはオリーブ油、酢、……魚醤……（薄い？）塩……胡椒などがあるのは、アレクシスが『鍋』の中で述べているとおりである。この作品の詩行は何種もの調味料を包括していて役に立つ。（というのは、こうした調味料については、あまりに古くない時代のものを取り入れるべきだからである）。【本断片三行以下】」。

【注】話し手は断片一二九のグラウキアースと小僧と考えるのが自然であろう。本断片冒頭の料理人の横柄尊大な調子は断片一二九のグラウキアースのそれに符合する。二〇もの調味料ないし香辛料が列挙されているが、これは喜劇の常套手段である。それはよいとして、主に植物からなるこれらの香辛料を同定することは容易ではないが、Arnottに従って、以下検討してみることとする。「胡麻」（セーサモン σήσαμον）は英語のsesameの語源であるが、オリエントから（名称も含めて）入ってきたものとされる。なお胡麻は結婚式に出される菓子の素材として非常に重要であったとされ、この喜劇で料理人が登場する背景に婚礼の祝宴があったと考えられている。「干し葡萄」（アスタピス ἀσταφίς）はパンやケーキに入れるとき刻んで使うことは今日行われているのと同じ。「茴香」（マラトン μάραθον）は古代から香辛料や薬用に用いられて今日に至っている。イノンド（アネートン ἄνηθον）もたびたび言及される香辛

料である。後に出るアニス（アンネーットン ἄνησσον）と名称も用法も似ているため古代から混同されたらしい。なお日本語のイノンドはスペイン語のeneldoに由来する。「辛子」（ナービュ νᾶπυ）はよいとして、「ケール」（カウロス καυλός）「シルピオン」（シルピオン σίλφιον）は訳も実態も怪しくなる。Arnottも'Its botanical identity has never been satisfactorily established, although it seems to have belonged to the asafoetida group'と述べている。アリストパネース『騎士』八二四ではこの二語が「シルピオンのカウロス」という形で出ていて、カウロスは普通名詞として植物そのものを特定しない茎の意味にもなるが、この場合同じ香草の茎と種ととるのが妥当らしい。「コリアンダー」（コリアンノン）は日本でも古名コエンドロといって魚を生で食べるのに必須とされた時期があったが、ヨーロッパでは日常的な香辛料である。「スマック」（ルーン ῥοῦν）、「キュミノン」（キュミノン κύμινον）、「ケーパー」（カッパリス κάππαρις）は西洋では今日でも日常的に用いられているそうだが、ケーパー以外は西洋料理の専門家以外にはあまり知られていないのではないか。スマックはウルシ、ハゼの類、キュミノンはドイツ語のKümmel、英語のcumminの語源となっているがヒメウイキョウのことらしい。「オレガノ」（オリガノン ὀρίγανον）もよく知られている。「ゲーテイオン」（ゲーテイオン γήτειον）はArnottによると、「今日では同定できず、恐らく絶滅した玉ねぎの一種で、球根を生じないか球根ができる前に抜いて利用されたらしい」と、テオプラストス『植物誌』などに基づいて述べている。柳沼重剛によるとDalby, *Siren Feasts*（筆者未見）にたぶんspring onionとあり、それならアサッキであるとしている（アテナイオス『食卓の賢人たち』一九九八年　京大学術出版会一三五頁）。いずれにせよ、葱類の葉の部分を言うらしく、アリストパネース『騎士』六六七では、これを魚のツマにしたとある。「アニス」（アンネーットン ἄνησσον）、「タイム」（テュモン θύμον）は、前者はテキスト上問題があるがここでは触れない。後者は断片一七九に既出。「セージ」（スパコス σφάκος）は古くから香辛料・薬用に用いられた。「煮詰めた葡萄酒」（シライオン σίραιον）は、葡萄汁の発酵以前か以後かはっきりしないが、これに蜂蜜などを加えて飲料としたという。「胡椒」（ペペリ πέπερι）はボルックスで πέπερι、アテーナイオスでセセリ（σέσελι）となっており、これなら英語でhartwortというセリ科の薬草の一種とされる。「ヘンルーダ」（ペーガノン πήγανον）、「リーキ」（プラソン πράσον）は、前者は強烈な臭いを発するミカン科の薬用植物、後者は韮の類。

一三三

で、いつでも柳の篭に入れて無花果を売ってる奴らのことを
なんで今更言う必要があるだろう？　奴らは必ず
堅くて出来の悪いのは底の方に入れておき、
熟れて立派なのを上のほうに並べてるんだ。
それで、こっちはそういうのだと思い込んで買い、
代価を払うが、向うはその銭をひったくって顎に放りこみ、
売ってる無花果は上物だと誓いながら未熟なのを売り捌く。

〈出典〉アテーナイオス　七六D。

【注】上のほうに良いものを並べておくという小売り人の手法は古今東西変らない。小銭を口に入れることはアリストパネース『蜂』七九一、『鳥』五〇二、『女の議会』八一八、その他に見えるが、それらの箇所では柳沼の言うような貨幣の質を確かめるという意味はない。今日では考えられないことだが、この頃の服にはポケットがなかったこと、また小銭がごく小さかったことから、一般に行われていたと思われる。それに、無花果は安価な食べ物であり、歯で噛んで確かめることに意味があるほど、上等なコインで買うとは考えにくい。なお「未熟な（無花果）」と訳したのはArnott説に従ったもので、辞書ではエリノン（ἐρινὸν）を「野生の無花果」としているが、Arnottによると、栽培された無花果であっても、「五月の雨の後で未熟なうちに落ちたもの」をもいうとしている。

一三四

「アレクシスも『鍋』の中で、料理の技術も自由人の研究領域の一つであることを明らかにしている。というのもそこでは料理人が生粋の市民であることが示されているからである」

〈出典〉アテーナイオス　六六一D。

【注】Arnottによると二つ目の文は『鍋』を読んだ者の単なる客観的な判断ではなく、劇からのルーズな引用であろうという。その根拠は一つには、二つ目の文が喜劇のイアムボスの韻律に容易に符号させることができることを挙げ、さらに語彙と内容の点で二つの根拠を挙げている。(1)「生粋な」と訳したアピネース（ἀπινής 直訳は「汚れのない」）という形容詞がハパクス・レゴメノン（すなわち古代から伝わる全ギリシア語文献中、この箇所で一度だけしか使われていない語彙）であるが、ピノス（πινος「汚れ」）からの派生語として形態上問題がない。つまり、ハパクス・レゴメノンであるがゆえにこの語はいろいろと校訂されているが、それはアテーナイオスの客観的な判断と思い込んでいるからであって（アテーナイオスが地の文で特殊な語彙を用いることはありそうにない）、アレクシスからの引用と考えれば問題がない、というのである。(2)ギリシア喜劇後期の作品中に登場する料理人はしばしばその技術が大いに評価されるべきものであることを主張している。メナンドロス『気難し屋』六四六「われわれの技術は神聖なものだ」、デメトリオスII断片一・三「この技術は煤で汚れた女王様（王国）だ」など。実態として前四世紀頃の料理人はたとえ自由身分であっても、低く見られる存在であったらしいし、奴隷身分であることも多かったようである。いずれにせよアテナイが衰退していく中での料理人の地位は微妙なものがあったようで、そのことが喜劇中での上のような自己主張にもつながっていると考えられるのである。本作品に登場する料理人グラウキアースの、知識をひけらかすような口ぶりや尊大さはそのような立場の裏返しであるように思われてくるのである。

『レウカスの女あるいは逃亡者たち』

ΛΕΥΚΑΔΙΑ Η ΔΡΑΠΕΤΑΙ

ディーピロスとメナンドロスに『レウカスの女』が、アンティパネースに『レウカスの男』が、クラティーノスに『逃亡した女たち』がある。ローマではプラウトゥスに『逃亡者たち』がある。レ

ウカスはギリシア西岸に添うイオニア諸島の北端の島で、その西側は最高で五〇〇メートルに達する絶壁となっている。この絶壁から罪人が落とされ、またサッポー伝説のように失恋した恋人が身を投げたといわれる。だがこの作品がサッポー伝説と関係があるかどうかは判らない。

一三五

古い口に葡萄酒を入れた大きな杯を……

〈出典〉アテーナイオス　四九八E。

【注】この引用は動詞がなく、「口」が人の口か、杯の口か判らない。「古い」にあたる形容詞を属格にして「葡萄酒」にかける校訂案が出されている。

一三六

狩猟用の槍と先の平たい投槍を持って来い……

〈出典〉ポルックス　一〇・一四四。

【注】「狩猟用の槍」については言語的な問題があるがここでは略す。「先の平たい」という形容詞は名詞化したものか、名詞が引用から省かれているのか判らない。

一三七

ソーセージのスライスと細切れの肉が来た……

〈出典〉アテーナイオス　九五A。

『レウケー』　ΛΕΥΚΗ

題名については諸説あり、女性の名、都市名、島名、さらにはアキレウスが死後運ばれた黄泉の国の島の名とするものなどあるが、特定できない。

一三八

甲：アジはどう調理すべきか知っているか？
乙：いえ、教えてくれますか。
甲：　　鰓をとり、
水洗いし、まわりのとがった鰭とぜいごを切り落して、
きれいに縦に切れ目を入れる。それからすっかり開いて
シルピオンでまんべんなくよく叩く。
そしてチーズと塩とオレガノをまぶす。

〈出典〉アテーナイオス　三二二C、「アジについてアレクシスが『レウケー』の中で言及している。話し手は料理人である」。

【注】「鰭とぜいご」としたのは一語であるが、Arnott の解釈に従った。シルピオンとオレガノについては断片一三二の注を参照。シルピオン〔の茎〕で叩くのは魚に香味を含ませるためである。

『レームノスの女』

AHMNIA

アリストパネースに『レームノスの女たち』という作品があり（散逸）、ヒュプシピュレーらの神話が素材となっていたと思われる。アレクシス作品もその可能性は否定できないが、残っている断片では分らない。

一三九

われわれのいるまんなかに焜炉と
豆のいっぱい入った焙烙があった……

〈出典〉ポルックス　一〇・一〇〇、「キュトラブース〔焜炉〕のことをパウノスとかアントラキオンと言う場合もある。アレクシスが『レームノスの女』の中で。【本断片】と。セイソーンは豆やその他を煎る器である」。

【注】「焜炉」とした語はアントラキオン（ἀνθράκιον）。「焙烙」としたのはセイソーン（σείσων）で豆を煎るときにこれを揺すりながら行うことから付いた名である。三脚の陶器の鼎状のものがミュケナイ時代からヘレニズム時代に至るまで、アテナイにおいて複数発見されており、こうした記述にぴたりと符合する。セイソーンは豆を煎る時ゆすぶるので、セイオー（σείω、揺する）という動詞から派生した名詞である。なおレームノス島産の豆は上質で有名だったことがアリストパネース『レームノスの女たち』からの断片三七二、「柔らかく見事な豆を育むレームノス……」から覗える。

『リノス』

ΛΙΝΟΣ

語源の定かでないアイリノス（αἴλινος）〔嘆きの歌〕というギリシア語が、間投詞アイライ（αἰαῖ）と人名リノス（Λῖνος）に分解され、「ああ、リノスよ！」と解されたことから、リノスなる人物に纏わる神話が創造されたという。リノス神話にはいくつかのヴァージョンがあるが、ここではヘーラクレースの音楽の師で、この英雄を叱責したために、打ち殺されたリノスである。リノスを題名とした劇は他にはアカイオス（創作は前四四七年以降）のサテュロス劇のみが知られている。しかしヘーラクレースに打ち殺されるリノスを描いた壺絵は前五世紀前半から現れており（前四七〇年頃のものが最初）、なんらかの劇がそれらの壺絵の創作のきっかけになったとすれば、題名はともかく同説話を扱った作品は五世紀始めには出ていたかもしれない。

一四〇

リノス：さあ、ここへ来て
どれでも好きな本を手にとるがいい。

それから書名を見てよく考えた上で
静かにゆっくりと読むのだ。
オルペウス、ヘーシオドスにいろいろな悲劇、
コイリロス、ホメーロス、エピカルモスを始め、あらゆる種類
の書物がある。そうすれば、どの本に飛びつくかによって、
お主の性質もはっきりするじゃろう。
ヘーラクレース：　　これにしよう。
リノス：どれ、何の本だね？
ヘーラクラース：　　料理法と、
書名にかいてある。
リノス：　　君は哲学者なのじゃな。
きっとそうに違いない。こんな沢山の本をほっといて、
シーモスの料理述を手にとるとはの。
ヘーラクレース：　　シーモスってだれだ？
リノス：なかなかの才子じゃ。今は悲劇に夢中じゃが、
彼を使った者によると、役者の中では一番の料理人じゃが、
料理人の中では、〔一番下手な〕役者だと……
……
リノス：こいつは大食症にかかっておる。
ヘーラクレース：　　何とでも言え。
言っとくけど、俺は腹べこなんだ。

〈出典〉アテーナイオス　一六四B、「君ら哲学者たちがいつでも食い物にかまけていることは、……（中略）……アレクシスが『リノス』という作品のなかで物語っていることから明らかなのだ。この作品の設定ではヘーラクレースがリノスの家で教育を受けることになっており、たくさんの書物の中からどれか一冊をとるよう言われる。ヘーラクレースは料理述の本をとって両手で奉げ持つ。そこでリノスが次のように言う。【本断片】」。

【注】リノスはヘーラクレースを βούλιμος（ブーリーモス）と形容しているが、この語は極度の飢餓状態にあること、もしくは「たくさん食べても満足しない」（アリストパネース『福の神』八七三への古注）一種の病的症状をも指す。ブース βοῦς「牛」とリーモス λιμός「飢餓」の複合語であるが、牛、馬を前につけて非常に大きなこと、程度が高いことを示す例は、たとえば βούπαις が「大きな子供」であるように、他にも見られる。

『ロクリスの人々』

ΛΟΚΡΟΙ

メナンドロスも同名の劇を書いている。

一四一

……二人の少女が〔液体を〕注いだ、
一人は熱いのを、もう一人は生ぬるい（メグケラス）のを……

〈出典〉アテーナイオス　一二三E、「アテーナイ人は温かい水をメタケラスと呼ぶ。……アレクシスは『ロクリスの人々』で、【本断片】」。

【注】メタケラスという語はアッティカ喜劇でのみ見られる。ケラスの部分はケランニューミ κεράννυμι「混ぜる」から来ている。熱い湯と冷たい水を混ぜて適度な温度にしたもの。断片一四二は『反アッティカ主義辞典』にある、ナウクレーレイン ναυκλήρειν という語に関する一語断片。「船主である」ことを指すこの語が、「貸家の持ち主である」という意味で用いられるケースがあることを言っている。

『リュキスコス』

ΛΥΚΙΣΚΟΣ

リュキスコスはリュコスの縮小辞。リュコスはアテナイの人名として珍しくないが、特に喜劇の登場人物として著名な者はない。断片一四三はアテーナイオス 595Dに、「〔ビューティオニーケーについては〕アレクシスも『リュキスコス』で言及している」とある。また、断片一四四は『反アッティカ主義辞典』で、アレクシスがこの作品でゾーダリオン ζωδάριον「幼虫」なる語を用いていると。

『マンドラゴラを使う女』

ΜΑΝΔΡΑΓΟΡΙΖΟΜΕΝΗ

マンドラゴラは古来媚薬として知られ、魔術との結びつきも深い。『スーダ辞典』には催眠効果があり、また忘れっぽくさせるとある。またその他にも、吐剤、解毒剤、鎮痛剤などとしても用いられた。残存断片からは、どの効能が焦点となっているのか判断しにくいが、これについては後で述べる。

一四五

とすれば、人間とはなんとやっかいな生き物ではないか。
まったく正反対のことばかりやってるんだから。
よそ者をありがたがって、身内のことは知らぬふりをする。
一文無しなのに、隣人には暮らしぶりがいいと見られる。
逆に人に金を貸す余裕があっても、有難がられるわけじゃない。
また毎日の食事にしたって、やはりいろいろと問題がある。
大麦のパンは白くなるように苦労しながら、
そのパンを使ってわざわざ黒いスープをこしらえ、
いい色をしたやつをその色でどっぷり染めてしまう。
また飲み物を冷やして飲むのに雪まで用意しておきながら、
料理が温かくないと、やたらにあたりちらす。
酸っぱいワインはぺっと吐き出すのに、
酸っぱいスープには小躍りして喜ぶ。
とすれば、多くの賢者たちが述べているとおり、
人間は生まれてこないのが最善で、
生まれてしまったら、出来るだけ早く死ぬことだ。

〈出典〉アテーナイオス 一二三F、「雪を飲んだということは、アレクシスも『マンドラゴラを使う女』の中で述べている。〔本断片〕」。

【注】黒スープはアテナイでもスパルタでも重用された。黒い色は

このスープに使用されるヒヨコマメの色からくるといわれる。大麦のパンはスープの濃度を上げるために使われる。アテーナイオスの引用のように、雪は、それ自体を飲むとする解釈もあるが、ワインなどを冷やしておくために利用された。この箇所でも文法上必ずしも雪を飲むとしなくてもよいし、文脈上もそれで問題がない。最後の三行はあまりに唐突もしくは極端な結論であるため、他の作品からの竄入だとする説がある。また、十二行と十三行の間に欠落がある可能性もある。しかし、このような飛躍は喜劇作品にはしばしば見られるもので、滑稽味を生むためにわざと行なっているとも言えなくはない。ミダス王に捕えられたシレーノスが語ったとされるこの箴言は、ギリシア文学史上の初出は『ホメーロスとヘーシオドスの歌比べ』七八―九行で、ヘクサメトロスの形をとっている。ソポクレースの『コローノスのオイディープス』一二二四行以下も同じ内容の言い換えであるが、ここでは詳しく述べない。この箴言に関連する箇所はArnottに詳しい。